

岐阜同朋

ぎふどうぼう

2020.07 123

- 鹿児島訪問にて(尾畑英和)
- 「同朋の会」ノス、メ(川辺町・養瑞寺)
- My Book



養瑞寺同朋の会

養瑞寺(加茂郡川辺町中川辺)

MyBook

動物たちの住む森の物知りなおじいさんのアナグマがある朝亡くなりました。森の仲間たちは寂しくてたまらず、みんなが集まり、アナグマさんの思い出について語り合います。それぞれ、アナグマさんからたくさんのお話を教わっていました。



わすれられない おくりもの  
スーザン・バーレイ著  
評論社 ¥1,320

していると感じるようになった。死は肉体の消滅ではあるが、いのちは無くなる。アナグマさんが仲間たちに残した知恵は、きつと後の世代にも順繰りに相続されていくのだろう。私たちの営みもまた、そのように相続され続けてきたのではないだろうか。名

死はお別れですが、それだけで終わりではありません。一緒に過ごした時間がわすれられないおくりものとなって、ずっと連なっていくのです。



前も顔も知らない幾多の人々がお念仏してきた歴史の上に私たちがいる。連続と引き継がれてきたものを後に繋いでいく。その事が願われているように感じる。家族葬が増えてきた昨今。アナグマさんの死を悼み、語り合った動物たちのように、亡き人を偲び語り合う場は無くなりつつあ

るのかも知れない。葬儀も法事も簡素になり、閉じた所で亡き人を送る。果たして、それで彼の人たちの残したものはきちんとして伝わっていくのだろうか。一人が一生の間で接点を持つ人の人数は凡そ3万人と聞いたことがある。そのひとりひとりとそれぞれ違った関係で生きていくのに、十人二十人程度の親戚のみで、その人の人となりのどれ程が見えるのだろうか。

人の死は別れのご縁であると同時に、出会いのご縁でもある。死が繋いでくれる人との縁に限らず、死によって照らし出される我が身の姿。そして、亡くなる前には眼を遮っていたしがらみが解れた時に初めて見える、気付かなかった亡き人の姿。様々な出会いがあり、それもまた亡き人からの「おくりもの」ではないだろうか。

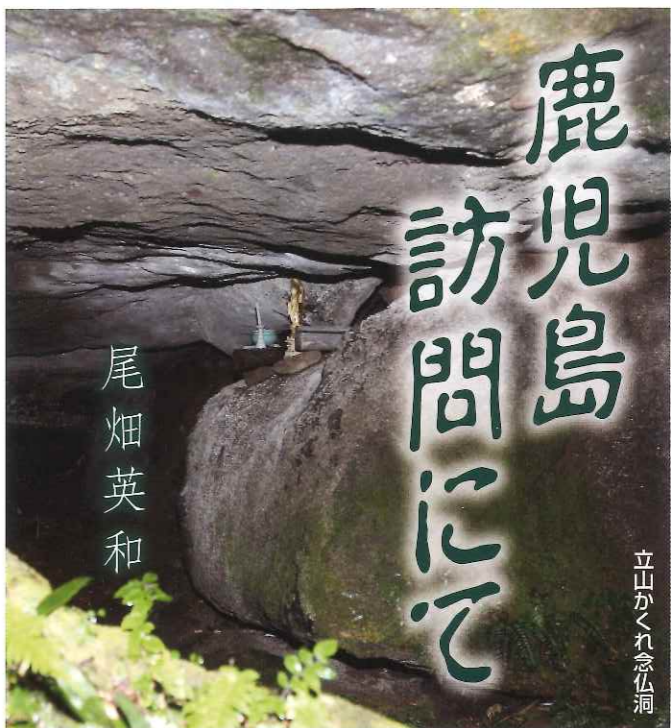
死のネガティブなイメージに隠れ見え難くなっている本当に受け取るべきものを教えてくれる一冊。

編集後記

新型コロナウイルス感染症が世界中で猛威をふるい、経済にも大打撃を与えている中、報道を見ていると必要以上に買い占める人、SNSでデマを流す人など「コロナウイルスが人間の三毒(貪・瞋・痴)を暴くが如く猛威を振るっているようにも思えます。

- マスクが欲しい、アルコール消毒が欲しい、ティッシュが欲しいと執着する貪欲。
- 原因はあの国が悪いと、国の対応が悪いとか、咳をするな!とか怒り狂う瞋恚。
- 誰が何を根拠に発したかもわからない情報に振り回され、ティッシュが無くなるから買わなくては!あそここの人は感染したらしいよ!など真実を見失い、物事の分別がつかない愚痴。

日々様々な情報が入れば入るほど不安になり恐怖にかられ、我先に買占めを行い割り込まれた、買えなかったと腹を立て喧嘩をして、周りの人は感染してないかと疑う。つまりは私たち自身が三毒に侵されているのではないのでしょうか? 本当に怖いのはウイルスよりも人間なのかもしれません。ウイルスに対して予防はとても大切です。しかしその前に自分の中にある三毒(貪・瞋・痴)を消毒し落ち着いて行動することが本当に大切なのではないでしょうか? (篠)



全世界を巻き込んだ新型コロナウイルスの蔓延により、多くの人々が亡くなり、今もお終息の目途は立たない。人類の敵ともいえるこのウイルスに打ち勝つために英知をもつてワクチンの開発に全力を投入する人類。致死率はインフルエンザの50倍とも言われている。

思えば、鴨長明の『方丈記』に

は、養和元（1181）年、京都は全国的な大飢饉の影響を受け、当時の京都の人口10万人のおよそ半数に迫る4万数千人が餓死し、鴨川は遺体の捨て場所と化したという記述がある。

親鸞聖人9才、得度をなさつたその年である。世にいう「養和の大飢饉」である。宗祖は、いかなる思いでこの悲惨な京都の町を眺められたか、またどんな想いで、出家得度そして比叡山に上られたか、想像するに余りある。

生きるということの中で、常に時代を越えて、自然災害のみならず様々な困難・難事がわが身を襲う。幸せ、安心とは何であるか、が問われてくる。宗教がなければ、私たちはこの困難な状況を不幸ととらえ、難事の無い人生こそが幸せと信じ生き

ていく。しかし、そんな思い通りの人生などあり得ない。何を生きる宗とするか。

いかなる困難も向き合っ、立ち上がって生きていく、そこに生きることの意味を見出す人生、そして問いが生まれる、そのことによって生かされている喜びを感じ、困難を越えていく歩みが始まるのではないか。

ともに寄り添い、つながり合うことよって目覚めていく歩みが始まっていく。宗祖は、南無阿弥陀仏を依りどころとし、その名号に御仏のご本願を感じ得られていかれたのではないか。不如意な人生であるからこそ、そこに大きな喜び、ご本願を感じ得して生きられた90年の御生涯であったことに我々は学ぶのである。

（2020年4月20日）

2020年1月22日から24日にかけて鹿児島での同朋社会推進委員会学習会に参加した。鹿児島県鹿屋市にある国立療養所星塚敬愛園を訪ねた。全国に13か所ある国立ハンセン病療養所の一つで、昭和10（1935）年に開設された施設である。

昨年6月のハンセン病家族訴訟は記憶に新しいところであるが、1931（昭和6）年の「らい予防法」の施行以来、大谷派は国家政策の中で、全面的にその方針を支え、隔離政策に加担してきた歴史がある。



敬愛園で最も印象に残ったのは、慰霊碑の前での講師、寺本是精氏（鹿児島市・本覚寺住職）の話

同年に、大谷派は患者の救援・慰安という名のもとに「大谷派光明会」を設立。療養所では、「皆さんが静かにここにいらっしゃる事が、そのままたくさんの人々を助けることになり、国家のためとなります」と教化していった。

教団は、1996（平成8）年、法廃止を受け、「無批判に国家政策に追随し、隔離という政策徹底に大きな役目を担った」と謝罪表明を出している。



であった。「らい予防法」と「優生保護法」を根拠とし、入所者の無数の子ども達が、光を見ることなく、産声をあげることなく間に葬られたことに対し、慰霊の思いを込め、この碑が建てられたということであった。

来園したある有名な脳科学者が、「私たちの学問でいうなら標本集めといったようなことですね」と反応されたことを聞いて、寺本氏自身が驚きと怒りを感じられたこと等、我々に話してくださった。園内での結婚の際は、男性は強制的に「断種」され、万が一、授かった子どもがあったなら、その子は強制的に墮胎させられたということであった。

人間とはなんと残酷で、差別偏見に満ちた生き物であるかが教えられる。



今、私たちは、新型コロナウイルスの感染者を排除し、その家族を排除していくことがあってはならない。寝る暇もなく医療従事者が患者に向き合い、患者と共に病氣と闘っておられる姿は誠に心からの敬意を表するものである。私たちは、この新型コロナウイルスによる未曾有の状況を、これまでの生き方を立ち止まって振り返る機縁とし、この苦難の現実を越えていかねばならない。

制に不都合であった  
であるとか、信者か  
ら京都の本願寺に  
大きな懇志が流れ  
るのを藩が恐れたの  
ではないかなどと言  
われている。



る岩穴も近くにあり、そこでも念仏がとなえられていた。名前の由来は、子ども達が近づいたり、念仏をとなえることを役人にしゃべったりすることのないよう

今日では、「真宗王国」の感がある鹿兒島であるが、過去には江戸時代を中心に300年近くにわたって、島津藩の民衆支配の一環として宗教統制(念仏禁制)がなされた時代が続いた。なぜ、専修念仏が禁制となっ

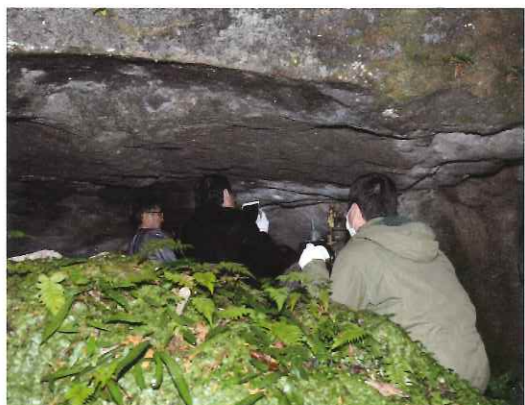
知覧特攻平和会館から南西へ約5キロ、立山かくれ念仏洞がある。こちらの地方ではかくれガマと呼ばれるが、ガマとは、鹿兒島弁で山の斜面などに掘った横穴のことで、入り口は狭く、大人一人がかがんでやっと入れるほどのものだ。中は広く掘られ



洞型念仏壇 (がまがたぶつだん) 「洞(がま)」とは鹿兒島・沖縄地方の方言で洞窟のことである。御本尊を収める念仏壇が、念仏禁制の歴史の中で、洞窟や船上でお念仏を称えるために、持ち運びやすく小さな型になった。今もこの名残を残す念仏壇が作られている。(鹿兒島別院・蔵)



に、盗人が住む「ぬすつとあな」と名付けられていたとのことであつた。さらに、小川のせせらぎの音で、念仏の声が周りに漏れ聞こえないようにという細心の配慮もなされていた。これらの洞穴の中で、当時禁止されていた念仏をとなえていたことから「かくれ念仏」の地といわれている。禁制を破った者は死罪を含めた重罪に処せられた。「隠れキリシタン」は有名であるが、同様に宗教が一部の藩によって禁止されていくということが江戸時代にはあつたことを示している。



(平和会館資料より)



今回の鹿兒島での学習会では、「知覧特攻平和会館」にも訪れ学びを深めた。ご承知のように、この平和会館は、1945(昭和20)年、日本軍は第二次世界大戦末期の沖縄戦において特攻という人類史上類の無い作戦を展開し、敵艦に体当たり攻撃をした陸軍特別攻撃隊員の遺品や関係資料を展示する施設である。沖縄を唯一の地上戦の犠牲の地とし、本土を守ろうとしたことも同様であるが、国体の維持のために、敵軍に大きな被害を与え、「厭戦機運」を広げ停戦に持ち込もうとした日本軍。その期待は、脆くも崩れていくのであるが、その作戦の中で、命の尊さ、尊敬を無視し、若者の命を犠牲にしていった国家的犯罪こそが特攻であろう(特攻隊の9割近くは、敵艦に体当たりすることなく撃ち落されていった)。会館の中で展示されている写真は、ほとんどが17歳から20代前半の若き兵士。国を想い、父母を想い、家族を想って死んで



隠し念仏壇 (かくしぶつだん) 鹿兒島城下の商家(薬師家)に伝わってきたものである。外見はタンスであるが、扉をけると念仏壇となっている。様式は京念仏壇である。城下には、上級武士・下級武士・商人たちが住んでいたが、『薩摩國諸記』によると、約6割が真宗門徒であると記されている。(鹿兒島別院・蔵)

現在、世界は平和であるとは言いが切れないが、少なくとも我々日本人は平和を享受している。そのことをどのようにいたすか。過去の歴史の事実を知ることから始まるのではないか。



いた1000人(内、知覧からは439名)を超す若者の家族にあてた手紙は、涙なしで読むことはできない。

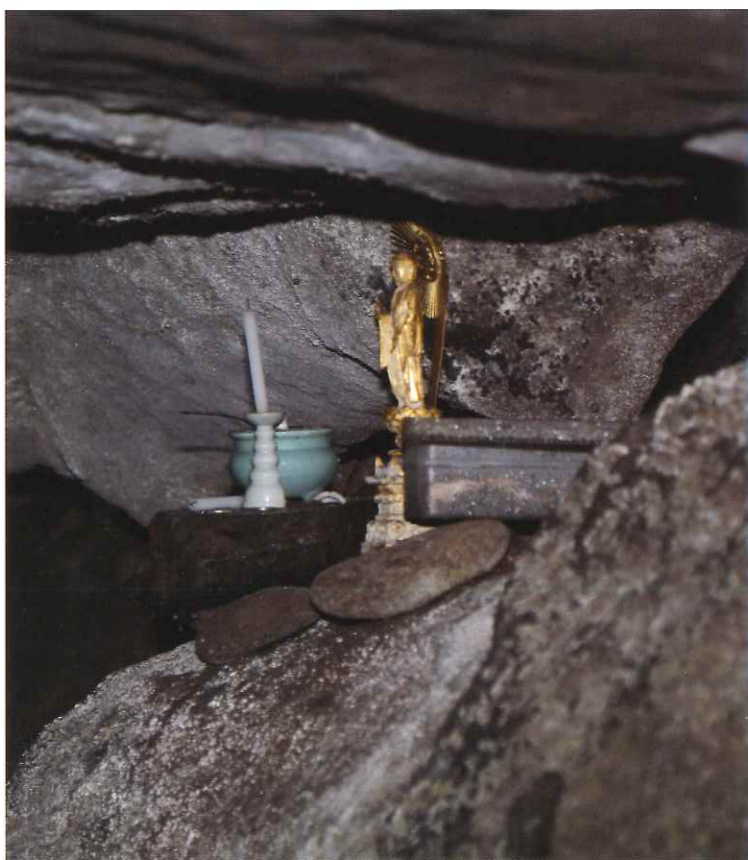
大谷派「鹿兒島別院」に参拝した。当派鹿兒島別院は、雄大な桜島の噴煙を正面に見上げることができる鹿兒島市の中央に位置している。鹿兒島市は人口約60万人の大都市であり、江戸時代には島津氏を藩主とした薩摩藩の城下町であつた。



しかし真宗(一向宗)は、キリシタンがそうであったように、苦しければ苦しいほど、虐げられれば、虐げられるほどその信心は増し、信者の結びつきを深めていった。まさに、かくれ念仏は、宗祖にとって「承元の法難」をはじめ数々の法難(不当な宗教弾圧)によって、人間の心・信心が屈することは無いという証左と言える。

また、鹿児島という土地には、全国的に珍しい「在勤制度」というものがある。全国の多くの真宗寺院は系襲(世襲制)によって開法道場が開かれていった歴史があるが、訪れた南九州市・西雲寺住職の鮫島宏規氏によると、鹿児島では、別院輪番が住職を任命し、寺を守ってきたという歴史があるとのことだ。

住職が任命制で、門徒の評判次第では罷免されることも頻繁にあったようだ。よって輪番の任命権が絶大で、そのことによって、過去には様々な問題が指摘された歴史を持つ。今でこそこの在



勤制度は南薩摩の一部地域を除き、影を潜めてきたが、一種独特の寺院運営の形態を持つ地域であった。

鹿児島教区は、教区改編で私たちの岐阜高山教区と同じ本年7月1日から、九州教区となり新たな歩みを進めていくことになる。さらに、すでに組の改編も決定し、鹿児島教区80余カ

寺が一つの組となることも決定している。

今回の学習会で強く感じたこと、それは、ハンセン病療養施設星塚敬愛園、知覧特攻平和会館、かくれ念仏洞や盗人穴……それぞれ国、藩、そしてその政策に加担していった教団、いずれも共通することであるが、巨大な組織によつて個人の尊厳や自由が奪われ



ていったという過去の事実である。そこには差別や偏見に満ちた人間の潜在的罪業性が見え隠れする。どこまでも組織を守るために、自己防衛のために他を傷つけ踏みにじっていくという私たち人間のあり方…。

本来、一人ひとりの命や尊厳を大切にし、一人の信心を支え励ますべきはずの教えが、社会の流れの中で歪められ、弱い人間の命や心を奪っていった過去の歴史があった。今、宗祖親鸞聖人の教えをつなぐ大谷派において、私たち一人ひとり、過去の過ちを学び、浄土を顕らかにするという本来性を見失うことのないよう念仏の道をとにもあゆむことが願われているのではないかと思う。



られ、現在は年に8回、宗祖のご命日である28日に近い土曜日から日曜日の午後3時から開催されています。基本的な日程は真宗宗歌、勤行(同朋奉讃)、座談会(交流)、住職の話、恩徳讃という流れで、座談



ん大変苦勞しておられました。ご家族のためにも二つ目を作成されました。この日はいつも以上に参加者が多かったそうです。

今回は養瑞寺同朋の会(ご命日のつどい)をご紹介します。養瑞寺は加茂郡川辺町にあり、周りは大谷派2ヶ寺、本願寺派が1ヶ寺、本門法華宗1ヶ寺、10ヶ寺が臨済宗と禅宗の多い地域です。

住職の水野純明さんは公立小中学校の教員をされていましたが、2016年に定年で退職されたからはお寺の活動に力を入れておられます。同朋の会その他には、女性部を中心にご門徒の皆さんに、おはぎやちらし寿司をふるまう「ようざい寺ランチタイム」、夏休みの期間小学生を対象にお勤めの練習・読み聞かせ・レク遊びをする「寺子屋ようざい寺」などの活動があります。

同朋の会は2017年から始め

会は、近年、同朋の会教導会研修会で講師の竹中慈照氏(当時大阪教区駐在教導)から紹介された「雑談からはじめる座談会」に倣い、「ぶつづつ話そうようざい寺」と題して行われています。

まず、難波別院発行の「銀杏通信」の「問いと答え」の「問い」の部分を読みます。「人間、死んだらどこ行くの?」や「自分の家の仏壇に他人をまつてもいいの?」などの問いに対して、本題から外れても構わないので、とにかく思ったことや感じたことを口に出すという形の話し合いの方法です。話し合いの最後に「答え」を読んで

住職が補足のお話をされ



ます。雑談でもよいので構えることなく話ができ場が盛り上がり、最後に「答え」を読むことによつて、全体がまとまったものになります。形式上、話し合いが深まりにくいという問題もありますが、参加者同士、何かを感じ合う場になればと水野住職は語ります。

しかし、どのような会でも、継続すればマンネリ化していくという問題があります。そこで養瑞寺では、ときに別の形で同朋の会を試みることがあるそうです。訪れた1月26日は、「腕輪念珠作り」を行っていただきました。いつものように正信偈のお勤めをした後、住職さんから「念珠」についての話しがあり、続いて坊守さんが作り方の説明をされ、皆でワイワイガヤガヤと楽しそうに話をしながら念珠を作られました。穴腕輪念珠は小さいので、穴に紐を通し結ぶことに皆さ

らに紐を通し結ぶことに皆さ

ちなみに、念珠作りは2019年10月7日に開催された教区教化委員会主催の研修会「寺子屋」に坊守さんが参加され、学んだことを活かして、同朋の会に

お寺は教えに合う場。「同朋の会」を継続しながら、ときには場の持ち方にも工夫をしてみる。願いを形にしようと試行錯誤しながら歩みを進めておられる住職さん。坊守さんの姿が印象的でした。

